

「パウロの証」

～キリストを迫害する人生～

使徒 22 ～ 23:11

メディアにとらわれる人生や、SNS を頼りに生きる情報化社会を描く風刺画が何枚か紹介されました。人間が中心となったこの社会の正しいことは真理から「ズレ」ていることがあります。そのような「ズレ」に気付いた時、見ないふり、関わらない、そんな選択をするのは簡単でしょう。しかし、私達に求められているのは正しい価値観を伝え、「ズレ」を戻すこと。問題を感じる視線は各々で異なり、各々の心に残った問題は、その人が向き合うべき課題なのでしょうと語られていました。そのためにまず私達は真理を知らなければなりません。私たちの価値観は真理に基づくものだからです。

パウロは一人の人のとの出会いにより、生き方を変え、多くの人を救いました。問題が起こる時は私達自身の生き方を変えることのできる時、そして、社会の中で問題に見えるような人や物事に出会う時は、私達が生き方を変えるきっかけを与えることができる時であると、私達は今、パウロの証から学んでいます。

■ 記憶の処理

パウロがキリストを迫害していたのは、あまりに残酷でひどいことでした。後に、生き方を変え宣教を続けたパウロも様々な迫害に会いました。エルサレムでユダヤ人に捉えられ、群衆が大騒ぎしている中で、千人隊長に弁明に機会を求めたパウロはとて冷静でした。(使 22:1～16)

私達は、自分の過去をきれいに処理しているものです。自分が英雄で立派な過去を誇る、もしくは悲劇のヒロイン、自分は無意味…。記憶の処理の仕方は人によって様々ですが、それによって処理された記憶は真理からズレていることがほとんどです。その時、自分が冷静さを欠いて間違った判断をしたからです。しかし、きれいに処理するためには自分のズレにより起こった問題を正当化したり、責任転嫁をしなければならぬので、本来起こるはずのなかった問題や、できるはずのない傷も残すこととなります。

「5つの目の言葉を選ぶ習慣」。よく語られるこの訓練は、日々伝える言葉の中に、自己的な思いや、人を傷つける思い、悪い影響を与える可能性がないかを探り、伝える時にはすべて相手のためであるように、言葉を選別できるようになるためです。それを続けることで、冷静な判断と行いができるようになるはずで

■ パウロの市民権とは

『千人隊長は、「私はたくさんの金を出して、この市民権を買ったのだ」と言った。そこでパウロは、「私は生まれながらの市民です」と言った。』(使 22:28) これまで、宣教のために証をしてきたパウロがここで初めて「弁明」のために自分のことを証しています。この市民権は今日、私達の暮らしにあるようなものではなく、階級により、選ばれた者だけが与えられる大きな権利でした。そのため貴族達は金でこの権利を買いました。パウロは、父の代に父が認められた功績で、市民権を得ており、植民地時代に奴隷であった民族が市民権を持つことは非常にまれなことでした。冷静に伝えたことで、千人隊長の信頼を得、群衆からの暴動を免れました。

■ 二人のアナニヤ

しかし、それでも暴動は収まらず、今度は最高法院を招集して、パウロは裁判にかけられます。そこで、大祭司アナニヤが登場します。大祭司アナニヤは「彼の口を打て」と命じました。同じ同胞であるパリサイ人であるパウロを裁判にかけ、まだ判決が出ていない状態のパウロに罰を加えようとしたのです。正しく判断せず、行ったことは「決めつけ」でした。これは私達の生活の中でもよく起こります。

もう一人のアナニヤはダマスコの途上で目が見えなくなったパウロの目を癒した人物です。(使 22:12,13) 同じ名前の二人のアナニヤの判断と行動が対照的に書かれています。

① 自分の過去をよく知る

間違えて処理していた過去の記憶を探り、その時の自分の行いが、イエスキリストの生き方とどう違ったのかを見なければいけません。過去に残る傷が自分を責めるなら、その傷をよく見てみましょう。その痛みを治すには、傷に残る悪いものを取り除かなければなりません。傷の処置と同じ、それを取り除く作業はさらに痛みを伴うことがあるでしょうが、その痛みは悪くするためとは違います。そして、繰り返し同じ過ちで傷つけないようにしなければなりません。また、その傷から自分を責めようとする思いも断ち切らなければなりません。

② 守りのために間違った判断をしない

大祭司アナニヤは間違った判断をしました。大祭司アナニヤは律法に従って生きる大祭司という立場にありながら、自分の立場を守ろうとして、間違った生き方をしていました。彼はその職権を濫用して、不正なお金を受給したり、人々を賄賂によって従わせていたと言われています。結局、彼は最後、同胞から暗殺されます。

一方、もう一人のアナニヤの判断は、正しいものでした。自分の仲間を迫害し、虐殺してきたパウロでしたから、アナニヤにも葛藤があったはずで

③ 祈りと備えからくる冷静な態度

千人隊長の判断は常に冷静でした。そしてパウロも冷静でした。どのような場面においても、冷静でなければ、人は聞いてくれません。感情は素晴らしいものです。冷静な喜怒哀楽と感情的な喜怒哀楽は違います。感情的になった時に取る行動はズレていることが多いものです。悪いことをしたときに母が泣く姿はとて心に残るが、もし、その時感情的に母が泣いて怒れば、同じ思いでも心には残らなかつたろうと話されていました。日々予期せぬことは起こりますから、何が起ころうとも冷静でいられるために、祈って備えることで行動は変わることでしょう。『身を慎み、目をさましていなさい。あなた方の敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、食い尽くすべき獲物を捜し求めながら、歩き回っています。』(1ペテロ 5:8)

さいごに

左膝の人工関節置換手術を受けた方のコラムが紹介されました。自分の心にある冷たさや苛立ちを振り返り、悔やむ日々の中で書かれていました。『イエス様の愛にあふれた清い温かみのある心に置換手術で変えてほしい。置換手術ができるのはこの地上であなただけです。』(コラムより引用)

祈れば、神様は心を必ず取り換えてくれます。取り換えられた心はイエス様の心と同じです。どんな時にもイエス様のように温かな心で冷静な行動を取ることができるよう、私の心を取り換えてくださいますように祈ります。

『その夜、主がパウロの側に立って「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことをあかししたように、ローマでもあかしをしなければならぬ」と言われた。』(使 23:11) 神様はいつも勇気づけ、励ましてくれます。心を取り換えてくださると信じて、祈り備え、どんなことが起こっても冷静に判断できるように、そしてパウロのように証して生きる者になりたいと願います。

(要約者:藤原友規子)

(2020年10月11日)